

2013 年度博士論文要旨

母親の子育てレジリエンスに関する研究

—子育てレジリエンス尺度の作成及び
子育て支援プログラムの適用を通して—

桜美林大学大学院 国際学研究科 国際人文社会科学専攻

尾野 明未

目次

序章

第1節 問題の提起 1

- 第1項 育児を取り巻く問題 1
- 第2項 母親の子育てストレスに関する研究動向 5
- 第3項 レジリエンス研究 13
- 第4項 子育て支援施策の現状 18
- 第5項 本研究の目的と構成 21

第2章 母親の子育てにおけるストレスとソーシャルサポートに関する研究 【研究1】 23

第1節 母親の子育てストレスとソーシャルサポートに関する調査研究 23

- 第1項 問題と目的 33
- 第2項 方法 34
- 第3項 結果 36
- 第4項 考察 44

第2節 子育てにおける心理学的ストレスモデルとソーシャルサポートの関連性につ いての検討 23

- 第1項 目的 23
- 第2項 方法 23
- 第3項 結果 26
- 第4項 考察 31

第3節 本章の全体的考察 47

第3章 子育てレジリエンス尺度の作成 【研究2】 50

第1節 子育てレジリエンス尺度の作成 50

- 第1項 問題と目的 50
- 第2項 方法 50
- 第3項 結果 53
- 第4項 考察 55

第2節 子育てレジリエンス尺度の妥当性の検証 57

- 第1項 目的 57

第2項	方法	58	
第3項	結果	59	
第4項	考察	61	
第3節	子育てレジリエンス尺度短縮版の作成と妥当性の検証		62
第1項	目的	62	
第2項	方法	62	
第3項	結果	63	
第4項	考察	64	
第4章	子育てレジリエンスの関連要因の検討【研究3】		65
第1節	子育てレジリエンスに影響を及ぼす関連要因の検討		65
第1項	問題と目的	65	
第2項	方法	65	
第3項	結果	66	
第4項	考察	70	
第2節	障害児を持つ母親の子育てレジリエンスに影響を及ぼす関連要因の検討		72
第1項	問題と目的	72	
第2項	方法	72	
第3項	結果	74	
第4項	考察	80	
第3節	子育てレジリエンス構成要因のモデルの検討		83
第1項	問題と目的	83	
第2項	方法	83	
第3項	結果	85	
第4項	考察	91	
第5章	子育てレジリエンスの構成要因の妥当性の実証的検証【研究4】		94
第1節	子育てレジリエンス促進プログラムによる心理的変化の構造図からの検討		94
第1項	目的	94	
第2項	方法	95	
第3項	結果	98	

第4項	考察	104	
第2節	子育てレジリエンス促進の介入プログラムの効果の検討		106
第1項	目的	106	
第2項	方法	106	
第3項	結果	108	
第4項	考察	112	
第3節	プログラム評定と自由記述の評価による子育てレジリエンスの構成要因の 検証	113	
第1項	目的	113	
第2項	方法	113	
第3項	結果	114	
第4項	考察	118	
第4節	本章の全体的考察	119	
第6章	母親の子育てレジリエンスと心理学的ストレスモデルとの関連性の研究		
	【研究5】	122	
第1節	子育てレジリエンスと心理学的ストレスモデルとの関連性の検		122
第1項	問題と目的	122	
第2項	方法	124	
第3項	結果	128	
第4項	考察	137	
終章		139	
第1節	要約	139	
第2節	総合考察	143	
第3節	今後の研究課題と展望/		156
参考文献		157	

子育てを子どもが自立するまでとするならば、子育ての期間は長く、精神的、身体的、経済的に負担が伴い、親役割を果たすことは容易なものではない。母親は、日々の子育て場面で経験する不快な出来事や、子どもの発達段階における発達課題など、子育てで生じるさまざまな問題に対処し、子育てに適応していかなくてはならない。さらに子どもに障害があった場合は、障害があるがゆえの問題に対処しなくてはならない。子育てで生じるストレスや問題に遭遇しても、そこから逃げられないからこそ、それを乗り越えて、適応的に対応することが求められる。

ストレスフルな体験をしても、すべての人が同じような不適応症状を示すわけではなく、心理的社会的に不適応症状を起こす場合もあれば、それを示さずに精神的健康を維持している人がいる。その個人が示す特性に注目して、Rutter (1985) は、レジリエンスという概念を提唱した。そもそもレジリエンスとは、劣悪な環境に置かれてもそれを跳ね返る精神的回復力のことである。

深刻な状態に対する適応だけでなく、個人の日常生活に果たす役割についても検討する意義があることが指摘されている (Klohn, 1996; 高辻, 2002)。Baraitser & Noacl (2007) は、子育てレジリエンスを母親が子育て体験の変化にうまく適応していく能力と定義している。そこで本研究においても、Baraitser & Noacl (2007) の定義に依拠して、子育てレジリエンスを、子育てに柔軟に適応する力を母親の子育てレジリエンスと定義した。子育てレジリエンスの概念を取り入れて、子育てにより適応的に対応するために、母親の心理を明らかにすることを試みた。

まず、研究1では、子育て中の母親が、子育て場面で感じるストレスに対してどのような対処をすることが有効なのか、また誰からのソーシャルサポートを得られることが子育ての助けになるのか、加えてソーシャルサポートがストレス対処の遂行に効果があるのか、質問紙調査法を用いて探索した。対象者は、幼児期の障害児をもつ母親 127 名。平均年齢は 35.88 歳 ($SD=4.49$) であった。統制群として幼児期の健常児の母親 410 名。平均年齢は 35.92 歳 ($SD=3.95$) であった。調査内容は、育児ストレス (清水, 2001)、ストレス対処法 (神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995)、ストレス反応 (Stress Response Scale-18 (SRS-18) (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬・坂野, 1997)、ソーシャルサポート (堤・堤・折口・高木・詫摩・萱場・五十嵐, 1994) のソーシャルサポートスケール (Jichi Medical Scale)、フォーマルなソーシャル・サポート (北川・七木田・今塩屋, 1995) の家族サポート尺度 (FSS) であった。

サポートと育児ストレスの関連を検討したところ、夫のサポートは母親の子育てストレスを軽減するのにもっとも重要なサポート源であった。夫からのサポートが少ないと知覚している障害児を持つ母親は、「放棄・あきらめ」のコーピングを健常児群と比較して遂行しない結果であった。

育児ストレスに対して、問題解決など積極的な対処である「調整的コーピング」を多く使用す

る者は精神的健康度の低下がなく、問題から逃避する消極的な対処である「逃避的コーピング」を多用する者は、精神的健康度の低下をきたしやすい（間・筒井・中嶋，2002）。本研究の結果は、先行研究と異なる結果であった。

これは、夫からの支援がもらえないと思っている母親は、夫を頼ることができず、自分がこの子を責任持って育てなくてはならないと思うことから、子育てに「放棄・あきらめ」のコーピングを遂行しないと考察する。障害児群は子育てから回避することなく、子どもに常に向き合っている状況が推察できる。

他方、家族以外の近隣、子どもを通しての知人など周囲からのサポートを得られていると知覚する障害児群は、育児ストレスが低い結果であった。近隣が障害幼児を養育するうえで助けになると知覚する母親が、ストレスに最もうまく対処し、精神的健康を良好に保っている（北川・七木田・今塩屋，1995）。夫や家族サポートの他に、周囲からの理解と支援が得られるかどうか、育児ストレス抑制に影響するといえる。更に障害児群にとってフォーマルサポートは、単に情報提供としての機関ではなく、「カタルシス」や「気晴らし」のコーピングの遂行を高めることに影響があることから、公的機関は障害児を育てる母親の心的な安寧に寄与していることを示すことをできた。障害児群をもつ母親を支援する機関や施設の関係者は、障害児をもつ母親がおかれている環境と子育てで生じるストレスの特徴を理解して、専門性の高い支援はもとより、母親の話を十分に聴くことができる環境と体制を整え心の気晴らしに働きかけることが、育児ストレス低減を促すことに機能するといえる。研究1では、障害児を持つ母親のソーシャルサポートとコーピングの特徴を明らかにした。

研究2では、レジリエンスの概念を、子育てにも適応して、母親の子育てレジリエンス尺度の作成と母親のレジリエンスの特性を探索した。Grotberg (1995) や Heiw (1998) は、レジリエンスの構成要因を、「I am (個人内要因)」「I have (周囲から提供される要因)」「I can (獲得される要因)」の3因子から構成されていると提唱している。本研究も、これに依拠して、子育てレジリエンスを3つの構成要因と仮定し尺度を構成した。調査対象者は、児童期の母親と幼児期の母親計 866名(平均年齢 40.19歳, $SD=4.45$)であった。

探索的因子分析により、子育てレジリエンス尺度の因子構造を検討した結果、3因子28項目が抽出された。第I因子(11項目)は、子どもに対して適宜に対応する能力や、家庭生活を支える上で必要な家事をこなす力に関する項目を含んでいることから「ペアレンタル・スキル」因子、第II因子(9項目)は、周囲の人からの子どもの評価や理解を得るなど周りからのサポートにかかわる項目を含んでいることから「ソーシャルサポート」因子、第III因子(8項目)は、母親と

して自分自身を肯定的に受け入れて、子どもや家族との関わりを楽しんでいる項目を含んでいることから「母としての肯定感」因子と命名した。

尺度の信頼性については、尺度全体および下位尺度（ペアレンタル・スキル、ソーシャルサポート、母としての肯定感）ごとに Cronbach の α 係数を算出し内的整合性について検討した。いずれの下位尺度も、 α 係数が.80 以上あり、概ね信頼性が認められた。構成概念妥当性は、子育てレジリエンス尺度と、育児ストレス認知尺度、特性的自己効力感尺度、精神的健康度尺度 (GHQ-12) との相関係数により検討した。全ての尺度間において、弱いから中程度の相関が見られ、構成概念妥当性を確認することができた。

さらに子育てレジリエンスの効果評価尺度の簡便化を図るために、子育てレジリエンス短縮版を作成した。子育てレジリエンス尺度短縮版は 28 項目から 12 項目に短縮され、子育てレジリエンスを育成する心理的教育介入の際には、参加者の母親の負担が軽減できると考える。

研究 3 では、障害児群と健常児群とでは、子育てレジリエンスの獲得ではどんな違いがあるのか、質問紙調査を用いて検討した。対象者は、養育施設、支援級、特別支援学校に通う 15 歳までの障害児を持つ母親 137 名。平均年齢 41.86 歳 ($SD=5.13$) 統制群は幼児期、児童期の母親 192 名 (年齢 38.26 歳, $SD=4.24$) であった。調査内容は、母親の子育てレジリエンス尺度 (尾野・奥田・茂木, 2011)、育児ストレス認知尺度 (種子田・桐野・矢嶋・中島, 2004)、特性自己効力感 (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)、日本版 GHQ-12 項目短縮版 (中川・大坊, 1985) であった。

健常児群の子育てレジリエンスと属性との関連について検討したところ、母親の年齢と第一子の子供の年齢によって得点差が確認され、「ペアレンタル・スキル」は、母親自身の年齢による成長と、子どもの年齢に伴う成長とともに多様な子育てを経験することに影響されながら、親と子の相互作用によって獲得するといえる。Grotberg (2003) は、レジリエンスは特別な能力や特性ではなく、誰もが保有し得るものとされ、どの年代の人でも伸ばすことができると述べている。これらのことから、子育てレジリエンスの社会的スキル能力である「ペアレンタル・スキル」は、子育てを通して学習することが可能で、成長することができることを示すことができた。

次に、障害児群の子育てレジリエンスと属性との関連について検討したところ、障害児群の子育てレジリエンスは、健常児群とは違う特性であった。母親の年齢による「ペアレンタル・スキル」得点の差は、10%の有意傾向が確認されたが、子どもの年齢による得点差を確認することはできなかった。障害児群の場合は、子どもの年齢による成長に影響されにくく、さらに子どもの数によって増える子育ての経験の量にも影響されることなく、母親自らが子育ての経験を通して、

「ペアレンタル・スキル」を高めていくと考える。

障害児群の子育てレジリエンスは、母親が子どもの障害を受け止め、児に必要な支援を本気で考慮し始めた時に、母親の子育てに取り組む姿勢や子育ての価値観が変化し、その際に子育てレジリエンスが高まると推測する。子どもの障害を受け止める時期は母親によって異なるため、年齢や経験に左右されないと考える。

障害児群の育児ストレス認知の特徴について明らかにするために、障害児群と健常児群の群間における育児ストレス認知得点の比較をした。育児ストレス認知のうち「児に対する拒否感情」は、有意差が見られなかったが、「育児に対する否定感情」においては、障害児群が健常児群より高い結果であった。障害児群は健常児群と比べ、子領域のストレスは高いが、子どもとの愛着には差は見られない（刀根，2000）、また、障害について悩んだり、責任感、養育の困難さや重荷を感じたり、子どもの行動や存在に対する拒否感を持ちやすいと報告している（松尾・加藤，1990）。このことから、障害児群は、子どもを拒否するネガティブな感情が育児ストレス認知を増幅させているのではなく、子育てそのものに負担を強く感じ、疲労感と不安感が高いと推測する。そこで子どもの行動特性の理解が、育児ストレス認知を低減することを助けるといえる。

次に、子育てレジリエンスを構成するどの要因に働きかけることが、より有効にストレスを低減できるのかを明らかにするために、子育てレジリエンスの各構成要因間の関連についてパス解析を用いて検討した。調査対象者は、養育施設、支援級、特別支援学校に通う15歳までの障害児を持つ母親135名。平均年齢41.86歳（ $SD=5.13$ ）。健常児の母親192名。平均年齢38.26歳（ $SD=4.24$ ）であった。

子育てレジリエンスを構成する「ソーシャルサポート」は、ストレス過程において直接低減効果を示さなかったが、「ペアレンタル・スキル」と「母としての肯定感」を媒介することで育児ストレス認知を低減し、ストレス反応を抑制する間接効果を示した。小花和（2002）は、レジリエンス概念は、個人内要因と環境要因が単独で影響するのではなく、各要因間の関連が重視されていると述べている。齋藤・岡安（2011）は、環境レジリエンスが個人レジリエンスを媒介することでストレス反応の低減をもたらす効果を明らかにしている。本研究は先行研究を支持する結果であった。

障害児群の子育てレジリエンスの「ソーシャルサポート」は、健常児群と比較して異なる特徴がみられる。障害児群は、健常児群より得点が低い結果であった。また研究1の育児ストレスとソーシャルサポートに関する調査研究では、障害児群は健常児群と比較して、夫、家族、友人からのサポートに差は認められなかったが、親戚、近所の人、子どもを通じて知り合った友人等、

周囲の人からのサポートは低い結果であった。北川ら（1995）は、近隣のサポートが育児ストレス低減に重要であることを明らかにしている。また渡部・岩永・鷺田（2002）は、知的障害の母親は子どもの問題行動に対して周囲の人の無理解や非難のために孤立して悩んでいることを報告している。これらのことから、障害児を育てる母親は、周囲の人や近隣の人との関係が、子育てをするうえで重要であると推測する。

研究3でレジリエンスが子育てストレスに有効であることを示したことは、子育て支援の介入プログラムの構築と、子育て支援の方針を立てるうえで重要な手がかりを得ることができた。

研究4では、幼児期と児童期の母親を対象にした子育てレジリエンスを高める介入プログラムを実施し、子育てレジリエンスの妥当性の実証的検証を試みた。子育てレジリエンス尺度の下位尺度である、「ペアレンタル・スキル」、「ソーシャルサポート」、「母としての肯定感」を高めることを目的とした介入プログラムを作成した。子育てレジリエンスを促進するには、心理学的理論に基づく行動療法と心理学技法を援用した。介入プログラムは、子育てに必要な知識やスキルを一方的に教えるのではなく、親の主体的な参加と、参加者同士の話し合いの中から学ぶ参加型学習方法を用いた。子育てレジリエンス尺度の構成要因の妥当性の検証には、グループディスカッションの逐語をもとにした構成図の作成、介入プログラムの効果評価尺度の得点による統計分析、プログラムの評価のアンケート調査内容のカテゴリー分類による分析を用いた。

プログラムの参加者は、参加者は、幼児期・児童期の母親32名（平均年齢37.61歳、 $SD=5.00$ ）であった。介入プログラムに参加しグループワークを通して、自分の子育てに受容と共感をしてくれるソーシャルサポートを得ることは、レジリエンスの構成要因である「ソーシャルサポート」を高めることであるといえる。また、子どもにまつわる感情や子どもに対する負の感情を、自己の中で整理し是正していくことは、母親としての自信を高め、母親としての自己を肯定的に捉えることができるといえる。これは、レジリエンスの構成要因である「母としての肯定感」を高めることであるといえる。自分なりの育児を確認する作業を通して、自分なりのやり方で育児に新たに向かうまでにもっていくことは、子育てのスキルと考える。これは、レジリエンスの構成要因である「ペアレンタル・スキル」に対応するといえる。

参加者個人の発言内容を基に、プログラムの取り組みを、概念を用いて構造図として表した結果から、子育てレジリエンスを高めることを目的とした介入プログラムに参加することによって、主観的な子育てエピソードを気兼ねなく話をする、話をしながら自分の子育てについての確認をする、フィードバックをもらいながらそれを再確認し、子育ての意欲に変えていくといったプロセスが明らかになった。家庭の人間関係における愚痴や母親らしくあろうとすることで苦しく

なっているにもかかわらず、話をしてくれる人がいること、肯定的に話を聞いてくれること、さらに経過とともに参加者同士のサポート的な関係性が促進されていくことの相乗効果が、参加者の子育てレジリエンスを安定させ、中には高められていく様子が明らかになったといえるだろう。

さらに子育てにうまく適応する力である子育てレジリエンスは、母親として肯定的に捉え、自信をもって子育てに対応することが出来る要素である「母としての肯定感」と、自分の子育てに理解と共感、受容をしてくれる周囲からの「ソーシャルサポート」と、子育てを適応的に捉え直すことが出来る「ペアレンタル・スキル」で構成されていることを確認できたといえる。

介入プログラムの効果評価尺度の得点による検討は、全6回の各回のセッションの実施前後の効果評価得点を、*t*検定を用いて比較検討した。効果評価尺度は、子育てレジリエンス尺度（尾野・奥田・茂木, 2011）、育児ストレス認知尺度（種子田・桐野・矢嶋・中島, 2004）、特性自己効力感尺度（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995）、日本版 GHQ-12 項目短縮版（中川・大坊, 1985）であった。

全6回のうちすべての回において実施後の子育てレジリエンスが高まることを確認することができた。特に「ペアレンタル・スキル」は全ての回において高まった。また、精神的健康度も全ての回において改善された。このことから、参加者の子育てレジリエンスが高まったことが、精神的健康度を改善することに寄与したことを裏付ける結果であったといえる。

プログラムの効果評価の結果と、介入プログラムの構造図から、子育てレジリエンスの構成要因は、「ペアレンタル・スキル」、「ソーシャルサポート」、「母としての肯定感」の3つであることの妥当性をある一定のレベルで確認することができた。

実証的介入の結果から、日常の子育て場面における不快な出来事に柔軟に対応することに、レジリエンスの概念を適応することができるといえる。介入プログラムがある一定の効果があることを確認することができたことから、子育てレジリエンスを促進することの教育的介入が有効であり、子育て支援の一つとして可能性を示すことができたといえる。

研究5は、子育てレジリエンスが心理学的ストレスモデルの過程にどう影響を及ぼしているのか、コーピング選択との関連と心理的ストレス反応への影響について調査研究をもって明らかにした。対象者は、幼児期・児童期の障害児をもつ母親、190名。平均年齢41.15歳（*SD*=5.40）。統制群は、幼児期・児童期の健常児の母親119名であった。平均年齢39.89歳（*SD*=4.27）であった。質問の内容は、子育てレジリエンス尺度（尾野・奥田・茂木, 2011）、育児ストレス認知尺度（種子田・桐野・矢嶋・中島, 2004）、特性自己効力感尺度（成田ら, 1995）、日本版 GHQ-12 項目短縮版（中川・大坊, 1985）であった。

共分散構造分析の結果から、「子育てレジリエンス」を高めることは、ストレス認知を媒介として、ストレスコーピング方略を適切に遂行することを促し、精神的健康が良好になることに影響することを明らかにすることができた。

研究1のサポート源とストレス対処の関連性について検討した結果と比較してみると、障害児群では、サポート源が育児ストレスに対処するのに適切なコーピングの遂行を高めるまでには影響しなかった。単に支援を得ることができると知覚するだけでは、ストレスに対して適切に対処し、精神的健康へと導くことにはならない。

佐藤・祐宗(2009)は、他者からのサポートを受けることができるネットワーク構築力がレジリエンスには重要であると述べている。井隼・中村(2008)は、「ソーシャルサポート」の働きは、多くの支援してくれる資源を所有するというと同様に、それら資源をどれだけ有効に活かすのかという実際の行動力も重要であると示唆している。子育てレジリエンスの「ソーシャルサポート」も先行研究と同様に、単に支援を得ることではなく、サポート構築する力も含まれている。支援的であると知覚するだけではなく、実際に支援を引き出すことができることが、「ペアレンタル・スキル」と「母としての肯定感」を高めることに影響を与え、そのことがストレスに対してより適応的に対応することに影響し、精神的健康に寄与するといえる。

レジリエンスとコーピングの関連について詳しく見てみると、子育てレジリエンスの高い母親は、「肯定的解釈」や「計画立案」等の接近型のコーピングや「気晴らし」や「カタルシス」などのような情動に焦点したコーピングを選択する。一方、子育てレジリエンス低い母親は、「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」の2つの回避型のコーピングをより選択する傾向にあった。田中・兒玉(2010)がレジリエンス得点の高い群は、低い群と比較してコーピング得点が高いことを明らかにしている。これらの結果は、先行研究と同様に、レジリエンスの高い母親は、ストレスから回避する対処ではなく、問題を解決する方向や、情動を調整する方向に働きかけることを示すことができた。

一方、健常児群では、レジリエンスを高めることによって回避コーピングを選択しても、精神的健康に影響しない結果であった。レジリエンスを高めることは、選択したストレスコーピングに影響されることなく、より精神的健康を促進することに寄与することを示すことができた。

本研究では、子育てに柔軟に適応する力としてレジリエンスの有効性を明らかにすることができた。支援するだけのソーシャルサポートではなく、母親がサポートを求める力と、サポートネットワークを構築する力を持てるように支えることが求められる。母親が積極的にサポートを利用することが、母親自身の母親としての自分と子どもをより受容し、子育てのスキルを高めること

に働きかける。さらに子育てレジリエンスが促進されることによって、ストレスの対処が適切になり、柔軟に適応的にストレスに対応することができる。そのことによって母親の精神的健康が高められることにつながることを明らかにすることができた。本論文は、子育て中の母親の心理的教育としてレジリエンスを用いた支援を提案することができた。

参考文献

- 穴井千鶴・園田直子・津田彰（2006）. 「自分の生き方」をテーマにした育児期女性への心理的支援 久留米大学心理学研究, **5**, 29-40.
- 荒牧美佐子・田村毅（2003）. 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因 ―幼稚園児を持つ母親の場合― 東京学芸大学紀要6部門, **55**, 83-93.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84** (2), 191-215.
- Baraitser, L. & Noack, A. (2007). Mother courage: Reflection.s. on maternal resilience. *British journal of psychotherapy*, **23** (2), 171-188.
- Bayat.M. (2007). Evidence of resilience in families of childrenwith autism. *Journal of Intellectual Disability Research*, **51**, 702-714.
- Bucy,J.E. (1996). An exploratory study of family rituals, parenting stress and developmental delay in early childhood. *Humanities and Social Sciences*, **57** (2-A) , 575.
- Catano,Janice Wood. (1997). Nobody's Perfect. The Minister of Public Works and Government Services. 三沢直子監修・幾島幸子（2000）. 「完璧な親なんていない！カナダ生まれの子育てテキスト」人なる書房
- Cobb,S.(1976). Social support as a moderator of lifestress. *Psychosomatic Medicine*, **38**, 300-314.
- Cohen, & Wills, T. A. (1985). Stress, social, support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- Dunkel-Schetter, C., Folkman.s., & Lazarus, R. S. (1987). Correlates of social support receipt. *Journal of Personality and psychology*, **53**, 71-80.
- 榎並純子・磯部智加衣・浦光博（2011）. レジリエンスがストレスに与える影響 経営行動科学学会年次大会：発表論文集 **14**, 490-493.
- 遠藤和佳子（2009）. ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムの理念と実践 関西福祉科学大学紀要, **13**, 37-47.
- Folkman.s.. & Lazarus, R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239
- 藤澤亜弥 野中弘敏,（2011）. 障害児を持つ親の障害受容過程及びそれに伴う困難：質問

- 紙調査を通して 山梨学院短期大学研究紀要, **31**, 126-144.
- 船越和代・榮玲子・小川佳代・野口純子・三浦浩美・松村恵子 (2003). 乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス 香川県立医療短期大学紀要 **5**, 17-24.
- Gerstein,E.D., Crnic,K.A., Blacher,J., & Baker,B.L. (2009) . Resilience and the course of daily parenting stress in families of young children with intellectual disabilities. *Intellectual Disability Research*, **53** (12), 981-997.
- Gribble,P.A., Cowen,E.L., Wyman,P.A., Work,W.C., Wannon.M., & Raouf,A. (1993) . Parent and Child Views of Parent-child relationship qualities and resilient outcomes among urban children. *Child Psychol Psychiat.*, **34**, 507-519.
- Grotberg,E.H. (1995). A guide to promoting resilience in children.strengthening the Human.s.pirit. *Early childhood Development: Practice and Reflection.s.*, **8**, Bernard van Leer Foundation,
- Grotberg,E.H. (2003). What Is Resilience? How Do You Promote It? How Do You Use It? In Grotberg,E.H. (Eds.), *Resilience for Today : Gaining Strength from Adversity. Praeger Publishers*, pp. 1-22.
- Hastings, R. P., Kovshoff, H., Brown, T., Ward, et al. (2005). Coping strategies in mothers and fathers of preschool and school-age children with autism. *Autism*, **9** , 377-391.
- 間三千夫・筒井孝子・中嶋和夫 (2002). 母親の育児ストレス・コーピングと精神的健康の関係 信愛紀要, **42**, 54-58,
- Hiew,C. C. (1998) . *Child resilience* : Conceptual and evaluation issues. In *Proceedings of the 23rd Child learning forum Osaka, Japan*, 21-24.
- 平田祐子 (2010). コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向 ―社会福祉実践への応用に向けて― *Human Welfare*, **2**, 5-16.
- Holmes,T.H.; Rahe,R.H. (1967). The Social Readjustment Rating Scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11** (2) 213-218.
- 堀口美智子 (2010). 「前向き子育てプログラム」の実践を通じた地域子育て支援の試み 淑徳短期大学研究紀要, **49**, 93-98.
- Horton,T.V.,& Wallander, J. L. (2001) . Hope and Social Support as Resilience Factors Against Psychological Distress of Mothers Who Care for Children With

Chronic Physical Condition.s.. *Rehabilitation Psychology*, **46**, 382-399.

井俣経子・中村知靖 (2008). 資源の認知と活用を考慮した resilience の 4 側面を測定する 4 つの尺度 パーソナリティ研究, **17**, 39-49.

稲葉正充・小椋たみ子・Catherine Rogers 他 (1994). 障害児を育てる親のストレスについて 特殊教育学研究, **32**, 11-21.

稲葉悠季・菅原身奈・押切志郎・木村真一・八木一平・八木一正 (2007). 物理教育 “9 歳の壁” 物理教育, **55** (3), 268-271.

石曉玲・桂田恵美子 (2006). 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討—乳幼児を持つ母親を対象とした実証的研究— 母性衛生, **47**, (1) 222-226.

石井京子 (2009). レジリエンスの定義と研究動向 看護研究, **42**, 3-13.

石毛みどり・無籐隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, **53**, 356-367.

石毛みどり・無籐隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティの関連 パーソナリティ研究, **14**, 266-280.

Jarvis, P. A., & Greasey, G., (1991). Parental stress, coping, and attachment in families with an 18-month-old infant. *Infant Behavior and Development*, **14**, 383-395.

神村栄一・海老原由香・佐藤健二他 (1995). 対処法略の三次元モデルと新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.

Kanner, Coyne, Schaefer & Lazarus (1981). Comparison of Two Modes of Stress Measurement: Daily Hassles and Uplifts Versus Major Life Events. *Journal of Behavioral Medicine* (4), 1-39.

加藤司・今田寛 (2001). ストレス・コーピングの概念. 関西学院大学 人文論究, **51**, 37-53.

Katz, A.H. (1965). Application of self-help concepts in current social welfare, social welfare, *Social Work*, **10** (3), 68-74.

川崎通子・宮地文子・佐々木明子 (2008). 育児不安・育児ストレスの測定尺度開発に関する文献検討 沖縄県立看護大学紀要, **9**, 53-60.

北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男 (1995). 障害児を育てる母親へのソーシャル・サポー

- トの影響 特殊教育学研究, **33**, 35-44.
- Klohn, E.C. (1996). Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Personality and Social Psychology*, **70**, 1067-1079.
- 小島千恵子 (2011). 望ましい子育て支援活動のあり方の探究 名古屋柳城短期大学研究紀要, **33**, 107-116.
- 近藤真理子 (2012). 地域の子育て支援のニーズの変化と今後の課題 —支援の充実とその内容についての一考察— 和歌山大学教育学務教育実践総合センター紀要, **22**, 157-136
- Kuhn, J.C., & Carter, A.S. (2006). Maternal self-efficacy and associated parenting cognition.s. among mothers of children with autism. *American Journal of Orthopsychiatry*, **76** (4), 564-575.
- 倉石哲也 (2010). 学齢期の子育て支援プログラムの開発と展開に関する研究 —子どもへの共感を高める親支援プログラム開発と効果— 子ども家庭福祉, **9**, 1-13.
- 倉石哲也 (2010). 学齢期子育て支援講座地域 (短縮) 版「PECCK-Mini」の効果に関する研究 神戸大学大学院人間発達環境研究科 研究紀要, **3** (2), 47-57.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事から立ち直りを導く心理的特性 カウンセリング研究, **35**, 57-65.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S., (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer Publishing Company, (本明寛・春木豊・小田正美 (監修), (1991). ストレスと心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- Lazarus, R.S. & Folkman, S.. 1984 Transactional theory and research on emotion and coping. *European Journal of Personality*, **1**. 141-169.
- Major, B., Caroline Richards, M. Lynne Cooper, Catherine Cozzarelli & Josephine Zubek (1998). Personal Resilience, Cognitive Appraisals, and Coping : An Integrative Model of Adjustment to Abortion *Journal of Personality and Social Psychology* **74** (3), 735-752.
- Margalet, M., & Kleitman, T. (2006). Mothers' stress, resilience and early intervention. *European Journal of Special Needs Education*, **21** (3), 269-283.
- Markei-Dadds, C., Turner, K.M.T., Sanders, M.R., (1997) "Every Parent's Group Workbook," Triple P International Pty Ltd, (松本有貴訳 トリプル P ジャパ

ン監修, (2005). グループトリプル P ワークブック)

Masten,A.S., Best,K.M., & Garmezy,N. (1990). Resilience and development :

Contribution.s. from the study of children who overcame adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425-444.

松尾久枝・加藤孝正 (1990). 精神遅滞幼児の母親の養育態度と発話との関連—質問紙でみられた拒否的態度と臨床観察での応答的発話との不一致— 特殊教育学研究, **28**(3), 45-51.

松尾久枝・加藤孝正 (1995). 障害児をもつ母親の養育負担感にかかわる要因に関する研究—社会資源の利用状況を中心として— 発達障害研究, **16**, 281-293,

松岡治子・竹内一夫・竹内政夫 (2002). 障害児をもつ母親のソーシャル・サポートと抑うつとの関連について 日本女性心身医学会雑誌, **7**, 46-54.

三国久美・工藤禎子・桑原ゆみ他, (2002). 1歳6カ月児の育児ストレスとストレスフルな出来事へのコーピング 北海道医療大学看護福祉学部紀要, **9**, 43-51.

Miller, A. C., Gordon, R. M., Daniele, R. J., & Diller, L., (1992). Stress, Appraisal, and Coping in Mothers of Disabled and Nondisabled Children. *Journal of Pediatric Psychology*, **17**, 587-605.

文部科学省 平成 22 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導の諸問題に関する調査」について

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf

森田美登里 (2008). 回避型コーピングの用いられ方がストレス低減に及ぼす影響 健康心理学研究, **21**, 21-30.

内閣府編 (2010). 子ども・子育て白書 佐伯印刷

中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票〈手引〉 日本文化科学社.

中野孝子 (1993). 家族ストレスに関する基礎的研究 —心身障害児を持つ親のストレス— 教育科学研究年報, **19**, 69-84.

中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子 (1999a). 母親の育児負担感に関する尺度化 厚生指標, **46** (3), 11-18.

中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子 (1999b). 育児ストレス認知尺度に関する因子不変性の検討 東京保健科学学会誌, **2** (2), 176-184.

- 中垣・間定・山田・石黒 (2009). ダウン症児を受容する母親に関する研究調査 (1). 日本赤十字豊田看護大学紀要 **4** (1), 15-19.
- 中塚善次郎 (1984). 障害児をもつ母親のストレスの構造 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **33**, 27-40.
- 中塚善次郎 (1985). 障害児をもつ母親のストレスの構造 (Ⅱ) 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **34**, 5-10.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1985). 特性自己効力感尺度の検討—障害発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, **43**, 306-314.
- 新見明夫・植村勝彦 (1980). 心身障害幼児を持つ母親のストレスについて ストレス尺度の構成 特殊教育学研究, **18**, (2), 18-33.
- 植村勝彦・新見明夫 (1981). 就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレスについて—健康幼児の母親との比較— 発達障害研究, **3**, 206-216.
- 新見明夫・植村勝彦 (1984). 学齢期心身障害児を持つ父母のストレス ストレスの構成 特殊教育学研究, **22**, 1-12.
- 小椋たみ子・西信高・稲浪正充 (1980). 障害児をもつ母親のストレスに関する研究 (Ⅱ) 鳥取大学教育学部紀要 (人文社会科学), **57**-74.
- 大日向雅美 (2001). 母性研究の課題—心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか— 教育心理学年報, **40**, 146-156.
- 尾野明夫・奥田訓子・茂木俊彦 (2011). 子育てレジリエンス尺度の開発の試み 日本ヒューマン・ケア心理学会 第13回大会 発表論文集, pp 65
- 大塚泰正 (2006). さまざまな測定方法 小杉正太郎 (編) ストレスと健康の心理学 朝倉書店
- 長内綾・古川真人 (2004). レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **7**, 28-38.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, **35** (1), 57-65.
- 大塚泰正 (2006). さまざまな測定方法 小杉正太郎 (編) ストレスと健康の心理学 朝倉書店
- Rutter, M. (1985). Resilience in the face of adversity: Protective factors and resilience

- to psychiatric disorder. *British Journal of Psychiatry*, **147**, 598-611.
- Rutter,M. (1987) . Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 316-331.
- 坂口由紀子 (2007) . 母親の育児ストレスに関する研究の動向 教育学研究室紀要：「教育とジェンダー」研究, **7**, 75-82.
- 坂口美幸・別府哲 (2007). 就学前の自閉症児を持つ母親のストレスの構造 特殊教育研究,**45** (3), 127-136.
- 阪木啓二 (2005). 知的障害児・者の母親のストレスについての一考察 精華女子短大紀要,1-8.
- 坂野雄二 (1989). 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, **2**, (2), 91-98.
- 坂田和子 (2006). Parent Training の維持効果について 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編, **7**, 9-13.
- 佐藤琢志・祐宗省三 (2009). レジリエンス尺度の標準化の試み 看護研究, **42**, 45-52.
- 佐藤俊人 (1998). 子どもの対人行動特性と母親の育児ストレスとの関連 仙台白百合女子大学紀要, **2**, 87-96.
- Schwartz,J.P. (2002) . Family resilience and pragmatic parent education. *The Journal of individual Psychology*, **58**, 250-262.
- 清水嘉子 (2001). 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究 ストレス科学, **16**, 176-186. .
- 白崎けい子 (2009) . なぜ学童期を取り上げるのか 現在のエスプリ, **503**, 5-27.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の横断研究から 発達心理学研究, **10** (1), 32-45.
- 杉本令子 (2008). 育児ストレス・育児ストレスコーピングに関する研究動向 日本女子大学大学院人間社会研究紀要, **14**, 133-14.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江他 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29.
- 高辻千恵 (2002). 幼児の園生活におけるレジリエンス 教育心理学研究, **50**(4), 27-435.
- 高辻千恵 (2002). 幼児の園生活におけるレジリエンス尺度の作成と対人葛藤場面への反

- 応による妥当性の検討 教育心理学研究, **50**, 427-435.
- 武田江里子 (2009). 18 か月児を持つ母親の「怒り—敵意」に関する要因および対児感情への影響 :—妊娠末期から産後 18 か月までの日本版 POMS による追跡調査から— 日本助産学会誌, **23**, 196-207.
- Tali,H. (2002). Parents of Children with disabilities: Resilience, coping, and future expectation.s.. *Journal of development and Physical disabilities*, **14** (2), 59-171.
- 田中満由美・倉岡千穂 (2003). 乳幼児を抱える専業主婦の疲労度に関する研究—ストレス・育児行動・ソーシャルサポートに焦点を当てて— 母性衛生, **44**, (2) 281-288.
- 種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2004). 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係 東京保健科学学会誌, **7** (2), 79-87.
- 立石陽子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽嵯峨野・金丸智美・荒牧美佐子・堀越紀香・砂上史子・武藤隆 (2004). 幼稚園における子育て支援の実態調査 御茶ノ水女子大学紀要 **2** 27-37.
- Taylor,Z.E., Larsen-Rife,D., Conger,R.D., Widaman,K.F., & Cutrona,C.E. (2010) . Life stress, maternal optimism, and adolescent competence in.s.ingle mother, African American families. *Journal of Family Psychology*, **24**, 468-477.
- 寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治 (2008). 中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要, **9**, 59-71.
- 刀根洋子 (2002). 発達障害児の母親の QOL と育児ストレス : 健常児の母親との比較 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, **15**, 17-24.
- Travis,W.J., & Combs-Orme,T. (2007). Resilient parenting: Overcoming poor parental bonding. *Social Work Research*, **31** (3), 135-149.
- 堤明純・堤要・折口秀樹他 (1994). 地域住民を対象とした認知的社会的支援尺度の開発 日本公衆衛生雑誌, **41**, 965-974.
- 堤俊彦 (2008). ペアレント・トレーニングを通じた未就園児と母親の行動および養育態度の変容効果の検討 近畿医療福祉大学紀要, **9** (1), 99-106.
- 植村勝彦・新美明夫 (1985). 発達障害児の加齢に伴う母親のストレスの推移—横断的資料による精神遅滞児と自閉症児の比較を通して— 心理学研究, **56**, 233-237.
- 渡部奈緒・岩永竜一郎・鷺田孝保 (2002). 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲

労感 小児保健研究, **61** (4), 553-560.

山田陽子 (2010). 療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究 川崎医療福祉学会誌, **20**, 165-178.

山下真裕子・甘佐京子・牧野耕次 (2011). レジリエンスにおける心理的ストレス反応低減効果の検討 日本精神保健看護学会誌 **20** (2), 11-20.

湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ (2007). 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャル・サポートの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **10**, 119-129.

渡部奈緒・岩永竜一郎・鷺田孝保 (2002). 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感 小児保健研究, **61** (4), 553-560.

渡辺弥生・石井睦子 (2010). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスにソーシャルサポートおよび自己効力感が及ぼす影響について 法政大学文学部紀要, **60**, 133 - 145.

厚生労働省 児童虐待の現状とこれに対する取り組みについて

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/120502_01.pdf